余録

第48号特集コメント記事への応答

末木　文美士

第四十八号掲載の特集の拙稿に対する森新之介氏のコメントに対して、応答したい。

第一に、森氏は「中世思想史研究は活発か」という問題を提起し、それに否定的な見方を示している。氏は、「日本思想史」という領域を閉じた自立的な領域と見ているようだが、私はその見方には反対で、日本思想史はもともと複合的な分野であり、単一の学会ですべてを網羅できず、多分野の成果を総合的に見るべきと考える。その点、澤井啓一氏のコメントは示唆に富む。

第二に、儀礼に関して、私が例としているのは宗教儀礼に限られ、世俗儀礼が入っていないという点であるが、これはその通り認めたい。その理由は、一つには私自身の能力の不足で、その面まで力が及んでいないためである。もう一つには、ritual としての宗教儀礼と ceremony としての世俗儀礼（儀式）とは、位相を異にするところがあり、同次元で並べられない点も注意する必要がある。

第三に、親鸞や道元について「「脱呪術」として高く評価されてきた」として、その従来の評価を鵜呑みにしている点である。そのような評価を見直すことが、今日の中世研究にとって最も重要なことと考える。「脱呪術」というウェーバー的な表現自体が、すでに「呪術」という否定的な価値評価を含む言葉を用いていて、適切と言えない。親鸞に関しては、拙著『親鸞』（ミネルヴァ書房、二〇一六）に私見を述べたので、ご覧いただきたい。

第四に、「当時における世俗が過小評価されていないか」という問題の指摘は、適切である。そのために、「両講座の中世研究では朝廷や貴族が十分に位置づけられていない」のは、確かにそのような面があったかと反省したい。私自身の能力の不足もあるが、作戦的に戦後の研究で無視されてきた宗教儀礼の見直しから出発するという方法を取ったためでもある。しかし、それだけでは不十分であり、もう一方で王権を中心とした世俗的な思想に十分な配慮が必要である。現在、神仏と王権を両極に据えて思想史を構築できないか、考慮中である。近くご批正を仰ぎたい。

第五に、「未来志向の問題意識」ということであるが、岩波版は、現代の問題をかなり意識して編集したことは事実である。しかし、ぺりかん社版は謳い文句はともかく、実質的な内容は、そのような問題意識を控えて、研究の現状を伝えるように努め

たつもりである。ただ、拙稿にも述べたように、完全に客観的な研究はあり得ず、必ず史観の問題と絡むのであり、その点では、歴史問題もまた、現代の問題意識を免れることができない。そのことは十分に心しておかなければならない。

（国際日本文化研究センター名誉教授）